

ばってん

事務長会報第28号

平成22年10月1日

長崎県公立学校事務長会

鳴滝高等学校内

〒850-0011 長崎市鳴滝1-4-1

電話 095-820-0056



ホテルモンテール長崎

TEL 095-822-2251
長崎市筑後町4番10号



消えゆくもの、消えたもの

副会長(長崎北高等学校) 藤島 正治

生来、記憶力が悪く、人様の名前はもちろん、昨日の出来事もよく覚えていない私である。妻に言わせると、私の記憶容量は1ビットだそうだが。

そんな私であるが、最近、消えゆくもの、消えたものに寂しさを覚えている。自分自身がまさに消えようとしているからだろうか。

今年4月の興行を最後に、建替えのために59年間の歴史に幕を下ろした「歌舞伎座」もそのひとつだ。歌舞伎座で歌舞伎を観たのは学生時代に一度きりであるし、歌舞伎自体も、前任校での巡回公演とあわせて、過去二度しか観たことがない。しかし、今回建替えられることとなった四代目の歌舞伎座は、昭和25年12月に改修工事が竣工しており、昭和26年生まれ私とほぼ同じ歳である。同じ年月を歩んできた歌舞伎座が、老朽化を理由に、近代的な高層ビルへと生まれ変わることを余儀なくされたことに、僭越ながら、定年間近の自分の姿が重なってしまう。

また、消えたものの一つに大学時代に知り合った「友人の死」がある。たった一度歌舞伎座で歌舞伎と一緒に観た友人である。昨年、58歳の若さで亡くなった。新潟出身の彼とは、大学の入学式の日知り合い、卒業してからも旧交をあたためてきた。学生時代の九州一周旅行、四国一周旅行、信州旅行、卒業前の1か月間のヨーロッパ旅行など、全国各地を廻ったり、よく酒を酌み交わしながら議論をしたりしたものである。その彼が亡くなった。亡くなったと聞いた時は、本当に心の中にポッカリと穴が空いたような感じであった。

ところで、皆さんもよく知っている童謡に「たきび」というのがある。かきねのかきねのまがりかど・・・で始まる、あの歌である。私たちの世代はもちろん、私の娘たちも慣れ親しんだ歌であるが、戦時中は、この歌を歌い皆がたき火をすると、それが狼煙となって敵機から狙われるということで、歌うことが禁止されたそう。また近年は、地球温暖化防止と火事予防の観点から、やはり、この歌を聞いた子どもたちがたき火や火遊びをすることがないよう、この歌を歌わせないようにしているという。戦時中と現代、それぞれの時代にそれぞれの理由で否定され、消えようとしている。非常時下の戦時中はともかく、現代も、童謡ひとつに敏感にならざるを得ない時代だということなのだろうか。私や娘の子どもたちが呑気で平和

であったのか、環境保護に鈍感な時代であっただけなのか、その真偽は私にはわからない。ただ、大人として、本来穏やかなはずの童謡を、大人の都合に振り回されることなく、子どもたちが自由に歌えるように、人間も自然も平穏で伸び伸びとした世界をつくりたいものだ。

また、年末の風物詩でもある「夜回り」も、大人だけのものになってしまい、子どもの世界から消えてしまったようだ。私が子どものころは、拍子木を打ちながら、火の用心、マッチ一本火事のもとなどと、夜の町を歩きながら、大人の声に合わせたものだが、今は、子どもの元気な声の響きが消えてしまった。

夜回りの思い出は、ただ町中を歩いた思い出ではない。普段会うことの少ない近所のおじさんやおばさんと知り合い、会話をする格好の機会であったことだ。一緒に夜回りをしたおじさんたちは、昼間に顔をあわせると、何かと声をかけてくれたり、また、悪さをして怒られたりもしたものだだったが、見知っているからこそその愛情がそこにはあった。夜回りは、地域で子育てをする土壌を作っていたのではないかと思う。叱られたという理由だけで、家に火を付けたり、親を殺したりすることが頻繁に報道され、家庭だけで子育てを行うことに限界が見え始めた今、子どもと一緒に夜回りが消えていくのは非常に惜しい気がする。

さて、事務長会に目を転じると、これからの数年で「現事務長の大半」が定年退職という形で去ってゆく。

それに伴い、新任事務長の急激な増加が見込まれるため、事務長会としても、今年度から新任事務長支援研修部を設置し、組織をあげて新任事務長を支援しているところではある。しかし、出納員は吏員から職員とされ、法律上は事務職員以外の職員も出納員になれることとなり、出納員ではない事務長が誕生する可能性もある。また、事務長ではなく室長、課長という経営に特化したただの一員として、学校の事務職員は事務長だけということになるかもしれない時代を迎えている。

このような変革期の時代にあって、今、事務長会に必要なのは、事務長会としての課題の明確化や共有化を図るとともに、何事にも危機意識を持ってこの難局に対処することではないかというのが、消えゆく私の忸怩たる思いである。

かくすればかくなるものと知りながら

やむにやまれぬ大和魂

8月9日ナガサキ

諫早商業高等学校 齊藤俊和

長崎で生まれ60年を過ぎたひとりとして、長崎の風土と気質を愛おしく思う。年齢を重ねる毎に長崎時間と意識との乖離が縮まり、今では長崎に流れる時間がすこぶる快適である。お宮日で歌われた万才町「長崎万歳」に胸が詰まり、「ヒミツノケンミンSHOW」長崎編では解説者になる。ブランド長崎名鑑10品目や産地ブランド5品目、平成「長崎俵物」さらに数々のお土産物を県外の友人知人に贈り、8人目のブランド大使を自認している。長崎に生まれ育った者の宿命だろうか、8月9日は長崎を生きた年月に比例して深くDNAに刻まれてしまった。それぞれがそれぞれの心に秘めた想いと記憶から消し去りたい体験を、その日が近づくと周りの喧噪が呼び覚ます。マスクは今や残り少なくなってしまう沈黙する被爆者をひとりづつ捜しあて、体験者の義務としての「語り」を迫る。

子供の頃、浦上川は遊び場だった。原爆瓦と呼ばれる瓦礫や、牛か馬かの大きな骨があったりする中を、フナ釣りをしたり、メダカを掬ったりしていた。生き残った唯一の親戚が浦上天主堂近くの本尾町で町工場を営んでいた。同じ歳の従兄弟を含めて男の兄弟が4人いたのでよく遊びに行った。通り道には子供の興味を引くものがふたつあった。平和祈念像は何処まで上っていけるかが関心事であり、左膝に跨ることが目標だった。浦上天主堂の崩れ落ちた教会の瓦礫の塊は、子供にとって楽しい隠れ家だった。たとえ廃墟の瓦礫の中に、かつて教会の壁から信者に微笑していた聖者像の焼け焦げて吹き飛んだ首が転がっていたとしても。平和祈念像も浦上天主堂も神聖なものではなく、長崎の街の一部だった。学校に「平和教育」はなく、戦争の語り部は母親だった。なぜ浦上川に骨があるのか、なぜ平和祈念像が出来たのか、なぜ浦上天主堂は廃墟なのか、疑問は母親が答えた。長崎に生まれ育った者はそれぞれが、多かれ少なかれ原爆と教会が長崎の風景として存在し、青来有一「聖水」の世界を持っている。

8月9日が賑やかすぎる。平和運動は1955年の原水協をはじめとして、1984年の「日本非核宣言自治体協議会」の設立以降、国連を舞台にした「平和市長会議」等次々に起こり忙しい。一方、長崎市民は苦しみ被爆者の量に圧倒され、誰もが言葉を無くし立ち尽くしていた。ただ原爆の被害を直接受けた、城山小学校、山里小学校等長崎市内の数校がささやかに慰霊祭を実施していた。核廃絶に取り組んできた人たちの65年の地道な市民運動が世界の指導者たちの利害計算に影響を与え、今日の盛り上がりにも及んでいることに水を差すものではない。それでも、平和宣言、総理大臣の言葉、遺族代表の献花を含め行政主導の式典はいらぬ。それは8月6日に任せてよい。ナガサキのその日は、かつてゴルゴダの丘を人並みが埋めたように、世界の人々が11時2分を目指して集まり、炎天下で頭を垂れるだけでよい。そして、その頭上から降り注ぐ5千度の爆風に吹き飛ばされ、焼き尽くされ、塵になって消滅することを想像できればよい。ナガサキはヒロシマと同じものを欲しがる必要はない。それぞれがそれぞれの場所でその日を思い起こし決意すればよい。その日は、後遺症と闘い、いわれない差別を生き抜いてきた人々にこの世の地獄が始まった恨みの日であり、原爆で死んだ家族を持つ人たちの悲しみと鎮魂の日である。声高らかに宣言したり、何かを要求する日ではなく、沈黙の日である。

今では長崎市民に限らず長崎県民が『核兵器廃絶と世界平和』教の熱烈な信者であり、『8月9日ナガサキ』のエキストラである。その時刻、時間が止まる。交通機関は止まり、体育競技は中断し、街を行く人は立ち止まり、全ての人々が黙祷する。高齢化した被爆者は残り少ない命を賭けて、不条理な死者の記憶に駆り立てられるように原爆の惨状の語り部となり、県下へ赴く。日本中が不戦を誓い、それ以外の意見はタブーである。

世界に注目される一日だけのナガサキではなく、364日間はナガサキでなければならない。しかし、8月9日の一日だけは被爆者とその家族に返して欲しい。クマゼミの鳴き声だけが激しく降り注ぐありふれた長崎のまま・・・

「宇久高校に赴任して」

宇久高校 富澤 毅

壱岐での4年間の勤務を終え、この4月宇久高校へ赴任しました。

離島での単身生活も5年目を迎えましたが、同じ離島といっても、生活してみるとその風土、気質の違いというものを感じております。

宇久高校は、昭和24年の平戸高校の分校から始まって、昭和41年に独立し現在に至っており、卒業生数も分校時代から合わせて4,290名を数えていますが、その間人口は減少の一途をたどっており、現在の生徒数は64名、今後とも減少が予想されており非常に厳しい状況です。

さて、校舎を見渡しますと学校の管理棟前には、大きなワシントン椰子の木が11本、校内にはフェニックスが5本ほど育てられており、見るからに南国風な雰囲気が出されています。また、体育館へ通じる木造の渡り廊下も非常に味わい深いものです。

宇久地区の特色ある教育としては、小中高一貫教育があります。



これは、平成11年度に県教育委員会から中高一貫教育の研究指定を受け、平成13年度より正式スタートし、この時から高校入試において学力検査が課されなくなりました。

小中高一貫教育は平成17年度に県教育委員会の研究指定を受け、平成20年度から「宇久地区小中高一貫教育特区」として本格的にスタートしています。

「夢を育て、夢を実現させる教育」を目指し、小学校2校・中学校1校・高校1校が協力して合同行事、乗り入れ授業等に取り組み、12年間の一貫した流れの中で、教育水準の向上を図っています。

さて、事務長になって5ヶ月目を迎えるわけですが、春季の新任事務長研修会の中で、「陰口をたたかれる

のも管理職の仕事と割り切り、管理職として言うべきことは言うように」という助言をいただきました。

特に数少ない事務室の中では難しいことですが、「言うべきことは言う。しかし言った後のフォローを大事にする」ということを心がけながら事務室内また学校内での人間関係を大切にしていきたいと考えています。

私がこの学校に赴任して最も驚いたことは、5月、6月と2ヶ月続いて諸納金が全員通帳から引き落とされたことです。100%というのは今までいた学校の中では考えられないことでした。以前の状況を聞いてみても、今までに督促に悩まされた事例は数少ないということで、これは宇久島の人々がそれほど裕福というわけではないにしても、学校のお金だけは納めなければという「意識」の表れを感じ、本当にありがたかったです。

さて、この島での生活で、最も不便を感じるのとは船便の少なさです。佐世保までの高速船とフェリーが1日共に2便で、13:10発のフェリーが佐世保への最終便であり、それ以外に14:20博多行きのフェリーが1日1便ありますが、この船が島を出る最終便となります。そのため、それ以降の緊急な場合には、個人の船をチャーターするしかないということです。

また宇久は時化以外にも濃霧による欠航が多いため、出張等に出られないケースも多く、公的にも私的にも影響が大きいみたいで、特に冬場が心配です。

ところで、宇久は釣りが好きな人にとっては、それこそいい釣り場がたくさんあって、1日中釣りを楽しめるようですが、その趣味がない私にとっては、特に休日の過ごし方に頭を悩ませています。

身体を動かす事が唯一の趣味なので、最近の猛暑の中専ら足腰の痛みと闘いながら、黙々とグラウンドを走っています。

事務長になって、この5ヶ月の間にいろいろな失敗もしました。人口3千人足らずの小さな島ですので、私たちのように島外から来た者は非常に目立ちます。こちらが知らなくても相手は自分のことを知っている。ということで、買い物一つにしても非常に気を遣います。外出する際にも人にあったら「挨拶」を欠かさないよう心がけています。

最後に、宇久には観光名所もたくさんあります。

大浜・スゲ浜海水浴場など、海が特に綺麗なのはいうまでもありませんが、その他にも対馬瀬灯台、アコウ樹など見るべきものがたくさんあります。

特に私が気に入っているのは、宇久で一番高い城ヶ岳からの眺めです。天気がいい日には韓国まで見えるそうです。



(スゲ浜海水浴場)



(大浜海水浴場)



(城ヶ岳からの眺望) 正面は小値賀島

私の趣味

北松農業高校 末 永 郁 雄

人に誇れるような特技や趣味はありませんが、ここ数年は「ウォーキング」にはまっています。

体重増加の傾向を解消しようと始めて、約13kgの減量に成功しました。もともと食べ物の好き嫌いがほとんどなく、なんでもおいしく食べられるので、何もしなければどんどん太ってしまい、生活習慣病になるのは目にみえています。

歩く時間帯は、最近年のせいか目覚めるのが早く、早朝が主です。5時頃から歩き始めて、途中、6時から営業している「だるま食堂」で朝食を摂り、長屋に戻るというワン・パターンの生活です。朝食前1時間、朝食後30分間で、正味の歩行時間は約1時間半、距離は9km位です。田平は自然に恵まれ、歩く場所には事欠きませんが、少し心配しているのは「いのしし」が出没するということです。しかし、幸いにしてまだ出会ったことはありません。

早朝に歩いていて、今まで2回、現川駅の近くと茨城県のつくばでパトカーに呼び止められ、職務質問を受けました。特につくばでは、早朝とはいえ、まだ満天の星が輝く中、ライトを片手に歩いていたら、「どこまで行きますか?」と尋ねられ、「どこまで行くか決めていません。」と応えたため、ますます怪しまれてしまったようです。教員研修センターで研修を受けている旨説明し、何とか納得してもらったのですが、「教員研修センターからここまで歩いてきたんですか?」と半ばあきれられてしまいました。

休日に時間がある時は、各種ウォーキング大会に参加することにしています。企業が協賛する大会では抽選会などのお楽しみもあり、今までにウォーキング・シューズが2回当たりました。JRウォーキングは参加料が不要で、スタート時刻も8時30分から11時の間で自分で決めることができるので、気軽に参加することができます。

また、田平に来てから知ったのですが、松浦鉄道が主催する「MRウォーキング」というのが毎月最終土曜日に行われています。高齢で元気な人が多く、私などはまだ「若手」の方です。

今までで最長距離を歩いたのは、昨年5月の連休に参加した「105ウォークラリー」です。

これは、アルカスSASEBOから島原城までの105kmを24時間以内に歩くというもので、初挑戦で完歩する人の割合は少ないそうですが、何とか20時間半で歩き通すことができました。途中から雨が降りだすという最悪のコンディションの中、国見の辺りで膝がガクンとなりました。どうやら歩きながら眠ってしまったようで、サッカーボールの形をした街灯が永遠に続くような気がしました。

ウォーキングは手軽に出来て、体力や技術もいらないので、これからも無理をせず、自分なりに楽しもうと思っています。



随想

「時は流れない。それは…」

長崎県埋蔵文化財センター所長
川久保 芳 洋

皆さんお元気ですか。

大村高校勤務の折、事務長会の皆さんには懇意にしてください、大変お世話になりました。この場をお借りし改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。

今年の1月から壱岐に来ています。3月にオープンした「壱岐市立一支国（いきこく）博物館」と併設する「長崎県埋蔵文化財センター」に勤務しています。博物館の管理運営は、壱岐市が指定する指定管理者（乃村工藝社）が行っており、来館者数も順調のようです。センターとしては、ここで県内の埋蔵文化財保護行政を担うとともに壱岐市や指定管理者と連携して博物館の支援などに取り組んでいます。

その博物館から歩いて15分くらいのところに原の辻（はらのつじ）遺跡があります。この遺跡は、面積にして約100ha、福岡ドームが14個も入るほどの広さで、博物館の4階にある展望塔から見るとそれがよく実感できます。

この遺跡からは、主に弥生時代の祭儀場跡や住居跡、それに膨大な土器類や豊富な金属器などが出土しており、魏志倭人伝にある一支国の王都にふさわしい内容を持つ遺跡として、中央の丘陵部（18.4ha）は、国の特別史跡（文化財で言えば「国宝」）に指定されています。現在、壱岐市が遺跡の復元整備を行っていますが、17棟の復元建物が立ち、周辺の電線も地中化されて、約2千年前の弥生時代の原風景を彷彿させる遺跡です。

この遺跡、弥生時代の国指定特別史跡としては、静岡の登呂遺跡、佐賀の吉野ヶ里遺跡とともに日本に3つしかない価値ある遺跡なのですが、歴史の専門家でない私には、その価値をなかなか実感できませんでした。ところが、それを払拭する出来事がありました。

それは、遺跡の南端にある小さな畑を案内してもらったときのことでした。その畑の奥に1mほどの高さの崖があり、崖面に土器のかけらが丸く（直径60cm程）並んで、無造作にむき出しになっているところがありました。

「これは甕棺（かめかん）です。弥生時代のものです。」という説明を受けたとき、強い衝撃を受けました。博物館に展示してある復元した甕棺を見たときとはまた違った何かの伝わってきたようで、一気に2千年の時を遡った感がありました。

編集後記

夏日（日最高気温が25度以上の日）、真夏日（同じく30度以上の日）どころではない「猛暑日」（同じく35度以上の日）が過去最高を記録した、長い夏が終わりました。

そして、いつもと違う「夏」を体験しました。

18年ぶりに学校現場に赴任し、初めてクーラーのある事務室で執務した夏、なぜか夏季休暇だけしか休ま（め）なかった夏、それでも体重が増えた夏、年度初めからの未処理業務に手付かずだった夏、熱中症対策に敏感になった夏、母校が夏の甲子園大会県予選1回戦で敗れた夏、等々。

さて、初めての事務長職を日々しっかり務めている

当時、壱岐は東アジア交流の拠点として、最新かつ最先端の様々な物や技術、文化、そして人々が行き交うにぎやかな場所だったにちがいません。その後、様々な歴史を経て今日に至っているのですが、少なくとも私たちが生まれる2千年も前から多くの人々がここで生活し、その積み重ねの上に今の私たちがあり、そして未来へと積み重なっていく。そのことを実感できた気がしました。そんな思いを、子どもたちにも自然な形で伝えられれば、生きる力や郷土を愛する心にもつながっていくのではないかと思います。

センターでは、今、特別史跡内の一部を発掘調査しています。濠（ほり）と呼ばれるところからは、土器のかけらなどが出土しています。それをじっくりと見ていると、あの畑で甕棺を見た時と同じ感じが伝わってきます。「時は流れない、それは積み重なっていく」という言葉を改めて実感しています。

島原工業高校の野中事務長さんから「ばってん」への執筆依頼がありました。野中さんは、このセンター・博物館建設にあたり、当初の計画段階から完成・開館まで全てにわたって携われ、ご苦労された方です。それを受け継いだ者として、喜んで書かせていただきました。ご期待に添えるものではないと思いますが、書きながら、いつの日か、事務長会県大会が一支国博物館で開催されればと思いました。



一支国博物館・埋蔵文化財センター



のかいないのか、もわからないまま、「ばってん」の編集を担当しました。大きな声では言えませんが、実は「ばってん」の存在すら知りませんでした。

でも、突然の依頼を快く引き受け執筆してくださった皆さん、そして広報部の諸先輩方の協力を得て、やっと発行にこぎ着けました。協力に心から感謝するとともに、読者の皆さんには、ぜひ執筆者の様々な思いを感じ取っていただければと願っております。

早起きと遠距離通勤に身体が慣れ、やっと訪れた秋の気配、そろそろ職責にふさわしい仕事をしなければ・・・、と思っています。

それにしても、暑い暑い「夏」でした。 S.N